

# 国語資料としての謡曲

## ——研究の概観とテキストの現在——

勝 田 耕 起

### 0 はじめに

2015年9月12日(土)、国立能楽堂の普及公演として狂言「黄鯿(もらいむこ)」と能「女郎花(おみなめし)」が上演されたのだが、これをフェリス女学院大学国文学会の学生と教員(合計二十名程)で観に行った。国文学会の毎年のイベントとして観劇はずっと行われているが、古典芸能では歌舞伎がほとんどで、10年以上能楽は選ばれていなかった。それが今の学生によって選択されたということには、本学日本語日本文学科の開講科目に2012年度から「能・狂言の世界」を新設した<sup>1)</sup>ことその他に、近年の能楽界の動きも関係することと思う。

2009年は能楽が国連教育科学文化機関(ユネスコ)の世界無形文化遺産<sup>2)</sup>に正式登録された年であり、2013年は世阿弥生誕650年であった。

研究関係では、2002年能楽学会が発足し、学会誌『能と狂言』は2015年5月までに13集を数える。2011年刊行の『新版 能・狂言事典』(西野春雄・羽田昶編、平凡社)は1987年の初版から12年ぶり2回目の改訂本<sup>3)</sup>である。特に、続いて刊行された

- ・2012年1月『能楽大事典』(小林責・西哲生・羽田昶著、筑摩書房)
- ・2012年4月『能・狂言を学ぶ人のために』(林和利編、世界思想社)

の二書は専門的な研究活動を前提に編まれたもので、学生などの入門者、あるいは周辺領域の研究者にとって大変有益なものである。

さて本題である「日本語学」との接点はというと、能の言葉、すなわち「謡曲」ということになる。近年刊行された専門事典類で「謡曲」項目の記述を見てみよう。『日本語大事典』(2014、朝倉書店)では、

謡曲には古い発音が残されていると考えられたこともあって、母音・子音の発音の問題、開合・四つ仮名の問題などを考える資料として謡曲資料が利用されることとなった〈中略〉特に謡曲譜本の胡麻点にアクセントが反映していることが明らかに

され、謡曲伝書の記述と合わせた検討がされるようになったことが注目される。(中略) なお、謡曲、謡曲伝書の表記、漢字・仮名の字体・字形、語彙などの点も今後研究すべきであろう。(前田富祺執筆)

とあり、主に音韻史研究に使われてきたということが知れる。一方、言語研究の主要分野である「文法」「語彙」「文字表記」については何の解説もなく、参考文献にも50年以上前の論文が、文法1つ(福島1958)、待遇表現1つ(森野1958)、掲載されるのみである。また、『日本語学研究事典』(明治書院)は2007年の刊行物でありながら、「謡曲」項目<sup>4)</sup>の参考文献は1976(昭和51)年で止まっている。

本稿は、特に語彙や文法の分野において研究史を概観しつつ、謡曲の用例に関心をもった人がそこを足がかりにして研究活動に入っていけるような情報を整理して提供しようとするものである。

## 1 言語資料としての研究史

古典芸能としての能と狂言は常に一体だが、言語資料として見た場合には、関わり方に大きな差がある。狂言の方は、室町時代の話しことばを知る手がかりとして、抄物、キリシタン資料とともにまず最初に参照されるものである。特に虎明本については、影印、翻刻と日本語史の専門家による注釈、語彙総索引といった基礎的研究資源が整備され、狂言台本を中心資料に据えた専門書・論文も多数公刊されている<sup>5)</sup>。

一方、能の台本すなわち謡曲については、日本語学的研究論文は非常に少ないと言える。例えば、国立情報学研究所のサイニイ(<http://ci.nii.ac.jp/>)で「謡曲」という検索語を入れ、「歌謡曲」という単語を排除すると700件以上の論文が出るが、それらのうち日本語学と考えられるものは1950年から2015年の現時点までに二十数本を数えるのみである。

以下、もちろん上の検索方法によるもの以外のものも可能な限りピックアップし<sup>6)</sup>、分野別に研究のありかたを確認していこう。

### 1・1 語彙史関係

活用語の語法などに関するものは次節「1・2 文法史関係」に含めているにせよ、論文数は非常に少ない。謡曲における語彙研究は、先行する古典の言葉をどのように受け継ぎ、また受け継がないか、という視点がまず考えられ、いわゆる「文体」を論じたものもここに含めた<sup>7)</sup>。

01. 佐竹大鑑「謡曲における禅語の二三について」『禅学研究』57、1969

02. 古保勲「謡曲のことわざ」『金沢大学 語学・文学研究』2、1971
03. 手塚瑛子「謡曲詞章における「ところから」と歌枕」  
『国文学 解釈と鑑賞』48-6、至文堂、1983
04. 佐藤喜代治「謡曲における仏教語」『国語学』154、1988
05. 河原寛「謡曲の用語」『園田学園女子大学論文集』25、1991
06. 表章「世阿弥および謡曲の「遊楽」の語をめぐる」『能楽研究』22、1998
07. 早川陽子「謡曲詞章における音便使用について―出典との関わりを視点として」  
『福岡教育大学国語科研究論集』41、2000-01
08. 竹本幹夫「謡曲調の文体」『江戸文学』37、ペリかん社、2007

本文に出てくる漢語の素性の研究が中心だと一応は言えそうだが、論考同士の関係は薄く、それぞれの着想による試論が散発的に提出されているにすぎない。これらのうち05番は「すずすご」「しをしを」といった俗語から和語の副詞全般を調査し、古典（古今集、源氏、徒然草など15種）に出典を持たない語をリストアップして、

古典尊重・伝統遵守の意識の強いこの世界においても、舞台を中心として、「見所」との一体感を確保する必要から、その工夫の一つとして、こうした俗語導入の試みもなされたのであろうと考える。

と結論している。『謡曲二百五十番集索引』（赤尾照文堂、1978）を利用した調査のため、そもそもその依拠したテキスト<sup>8)</sup>がその時代にしても最善ではない、という面はあるが、着想としてはこの方向で謡曲語彙の研究はもう少し進められるのではないか、と思われる。

## 1・2 文法史関係

### 1・2・1 概観

文法分野（敬語を含む）は湯沢幸吉郎が戦前に先鞭をつけたため、それを踏まえて検証していく論考が以下のように展開した。11番の「俗語」というのはおおよそ（中世的な新しい語法）のことを指している。

09. 菊澤季生「謡曲に現はれた代名詞に就て」  
『国語研究』（国語学研究会）7-7、1939
10. 湯沢幸吉郎「謡曲に現れる『候』」『国語学論考』八雲書林、1940
11. 湯沢幸吉郎「謡曲と俗語」『能楽全書 第3巻』東京創元社、1942
12. 浅野信「近古・近世の中止法・接続法の一態―謡曲・芭蕉・西鶴」  
『国語研究』（国学院大）1、1952

13. 小山弘志「謡曲を読むために」『国文学解釈と鑑賞』18-12、1953  
(再録：『時代別・作品別解釈文法』大野晋等著、1983)
14. 森野宗明「謡曲詞章小考一言語の人物による使いわけ」  
『国語』6巻、東京教育大学国語国文学会編、1958
15. 福島邦道「謡曲の文法」『日本文法講座4 解釈文法』明治書院、1958
16. 東節夫「謡曲の解釈と文法上の問題点」『講座 解釈と文法5』明治書院、1959
17. 福島邦道「謡曲における敬語」『国文学』(学燈社)5-2、1960
18. 清水功「謡曲の指示語について一場面と様式」  
『名古屋大学国語国文学』23、1968
19. 志田延義「謡曲・狂言・歌謡の敬語」  
『敬語講座 4 近世の敬語』明治書院、1973
20. 長谷川政次「否定問いかけに対する応答の仕方 説話・軍記物語・謡曲・キリシタン資料について」『和洋国文研究』18、1982
21. 富田信一「『謡本』における「われ」の表現」『淑徳大学研究紀要』24、1990
22. 早川陽子「謡曲詞章における音便使用について—その時代的变化に着目して」  
『鎌倉時代語研究 第23輯』、2000-10
23. 福川雅美「能の『語り』再考—ケリ文末の表現から—」『表現研究』88、2008
24. 梅林雅美「能舞台における指示詞の表現性」『表現研究』96、2012
25. 小林賢次「反語表現における文語性と口語性一元和卯月本謡曲と大蔵虎明本狂言とを比較して」『近代語研究 第16集』武蔵野書院、2012

中でも15番：福島「謡曲の文法」は、前後の時代と用法上の異なりのあるものについて体系的に(品詞論的枠組みで)まとめたもので、謡曲の読解にあたって心すべき点を次のように述べている：

依拠した古文・古歌のもつ古い文法と能楽大成時代の文法とが入りまじっている。また、同じく古代語を用いながらも、その語の本来の意味・用法からいちじるしくはなれてしまったものもあるのである。(p.254)

謡曲本文に見られるさまざまな用例を引いて実証的に検討したもので、謡曲における文法事項の着眼点はこれで十分に概観できた、と思える好論だったといえる(注の【図】参照)。しかしそのせいか、以後謡曲の文法事象を正面から捉えようとする論文はあまり生産されず、謡曲は大抵、室町時代の語法について考察するときに都合のいい用例を補充する程度の使われかたである。オジャル・ゴザルなどからなる室町末期の敬語体系を明らかにしようというときに「狂言台本」が欠かせないのとは対照的である。

これはしかし、当然と言えば当然のことで、謡曲テキストを積極的に使わなくても室町時代の語法の追究は可能である、ということなのだろう。論文22番によれば、江戸期の謡曲本文で非音便形が使われるのは、「擬古的性格を強く打ち出そうとした」「他の流派との差別化」であると分析されていて、これは前掲05の論考が謡曲における俗語について「観客との一体感を求めた工夫」と見なしているのと同様である。つまり表層に見えている言葉の一つ奥には、舞台劇としての作為が見えてくるのであって、それは時代の言語を間接的に照らし出すものなのである。この、能（謡曲）というテキストの特殊性の解明を徹底して推し進めたものが23番の福川論文である。舞台劇としての能の表現構造・具体的な場面の展開において、ケリ文末が担っている機能を明らかにしたものが、目的は中世語ではなくて“能の理解”の方にあるように思われる。能をよりよく読み解くために言語面からもアプローチをするという立場では次のものもある：

26. 小林千草・千草子著『ことばから迫る能（謡曲）論—理論と鑑賞の新視点』

(武蔵野書院、2006)

とにかく、その扱いにくいと言われる、入り組んだ詞章<sup>9)</sup>にチャレンジして福島(1958)を超える文法事象の発見・整理・報告が見込めるか、と考えたとき、大方の研究者はそこまで価値を認めなかったということであろう。

1・2・2 現時点で踏まえるべきもの

指示語、敬語、など問題を絞った論考が散見される中、新たな講座物（全7冊）における中世言語（文学）資料の代表的ラインナップの一つとして、再び「謡曲の文法」記述が企画され、30年前と同名の論文が発表された。

27. 山内洋一郎「謡曲の文法」

『国文法講座 5 時代と文法—近代語』明治書院、1987  
音韻史関係はともかく、文法史に関しては謡曲という資料と強く結びついた研究の蓄積は、上に見たように、ほとんど無かったといえる。よって27番が参考文献として挙げているのも15番（福島1958）と16番（東1959）であった。ただし、その30年間で謡曲テキストの整備（岩波の日本古典文学大系「謡曲集」上・下が1963年刊行、『国書総目録』（1969年刊行）「能の本」項目における伝本の系統的整理など）や一般的な文法史研究は進んでいるので、そういうところに目配りをして、構文論を強く意識して謡曲の言語事象を切り取って見せ、また、先行研究と同じ文法要素を紹介する場合には分析の手続きを丁寧にして主張の妥当性を増している<sup>10)</sup>。

一例を挙げれば、平安時代に希望を表した「ばや」という終助詞の用法について、す

でに湯沢1942が「酒を勧め申さばやと存じ候」(千手)のような例を4つ挙げつつ

謡曲の「ばや」はもっと軽くて、今の口語の「う、よう」、文語の「む」と言ひ換へて丁度当る様な場合に多く用ひてある。(p.194)

と記しているのに対し、福島1958は

「ばや」は話し手の希態を表わすのであるが、意志を表わす「む」の意にも訳せるのである。(「大観」の訳はほとんどそうになっている。) (p.262)

と、同じ方向だが「話し手の希態」「意志」といった文法用語を補いながら湯沢とは異なる箇所からの類例を2つ挙げ、さらに「身は白雪と消えばやなん」(竹雪)という湯沢の提示しなかった形を紹介している(福島はこれについて、「ばや」を助動詞のようにつかっている、と述べている)。

しかし、言い換えられそう、訳せそう、というのは直感的な見込みであって分析ではなく、従って説明としては不十分である。これを山内1987は「あれを見れば舟が出候。急ぎのらばやと存候。いかに船頭殿舟にのらふずるにて候。」という例をもとに、

ここで「いかに船頭殿」と声を掛けすぐに実行に移ることに注意したい。『安宅』でも〈中略〉直ちに〈中略〉行動を起す。従って、この「ばや」は中古の「…したらよいが」「…したい」という願望ではなく、意志の意味と見なくてはならない。ただし、「と存候」と結合して、舞台言語として「…しようと思います」という表現と見る方が良いだろう。「…ばや。」と言ひ切って表出する口語的生気はここになく、「と」で受けられた心理的表現に退歩しているのである。(p.259)

と述べ、用例の文脈の読みと「ばやと存じ候(と思ひ候)」という連語・複合辞的な形で出現することの意味とを記しており、実証的であり理論的である。

文法関係は27番をまずは踏まえて、発展させていかなばならない。冒頭に記した二つの日本語学の事典がこれを落としていたのは残念なことである。新しく刊行される事典類は、その時点での最新情報、学問的到達点を掲載しなければ意味がないのだから。22番は助動詞マジの連体形がマジキなのかマジイのかに目を付けているが、同じテキスト(元和卯月本:後掲⑥)のマジキとマジイについてはすでに27番にも言及がある。仮に室町期写本と江戸期版本の比較という22番の論旨と関わりがないとしても、注で触れるなどして現象とその解釈を蓄積・共有していくことが、資料性の解明には望ましい。

### 1・3 音韻史関係

現行の謡曲の発音の特殊性については昭和初期から論考があり、特に謡曲の用語で「フクム」「ノム」と呼ばれている漢字入声音ツジツツ(日月)、マツジイ(未代)、セツナ(刹那など)の調音法諸説

と室町時代の一般的発音とのつながりについて論じたものに、

28. 岩淵悦太郎「口誦資料の国語史的価値」『国語学』76、1969

がある。同論文で岩淵は、謡曲における伝承について以下のように述べる：

謡曲の伝承の仕方は、現在のやり方から見ても、かなり厳密であったと思われる。師匠の発音を直接耳でとらえ、口写しで伝えて行くのであるから、少なくとも、実際の言語の発音の授受よりはきびしいものであることは言うまでもなからう。もし、この伝承が厳密に行われて来たとするれば、現行の謡曲は、室町時代以来の謡い方や発音を伝えているわけである。(pp.89～90)

つまり非常に保守的な性質が古態を保存したと見るわけである。これは現代方言の中にかつての八行音 [F] や破裂のダ行音 [du] を見出すのと似ている。

こういう研究の流れにおける、近年の代表的なものに次のものがある。

29. 坂本清恵「近代語の発音 謡曲伝承音との関係」『国語と国文学』79-11、2002

また一方、アクセントの研究も古くからあり、最新のものとしては次のものがある。

30. 坂本清恵「金春禅竹の胡麻章：施譜法とアクセント反映度」

『論集（アクセント史研究会）』10、2014

音声・アクセント関係のその他の論文は3節に目録として記してある。

## 2 テキストの問題

### 2・1 能における文献学

多くの近世以前の古典籍と異なり、謡曲の場合はその大成者たる世阿弥（1363～1443）の自筆本が残存しているので、まずはこれが一等資料ということになる。その存在は宗家には知られていたが、世間に紹介されたのは大正末期以降で、八尾正治によれば<sup>10</sup>「江戸期からの国学者による文献操作のあった日本古典文学に反し、能は好事家による手慰みの対象でしかなかった〈中略〉第二次大戦前迄は、そのような〈＝諸本校合など文献学的な〉側面が研究に於いて厳密な形で問題にされることはなかった」という状況であつたらしい。野上豊一郎も「謡曲の原典批判」（日本古典全書『謡曲集 上』附録、朝日新聞社、1957）において（以下引用文中の傍線、ふりがなは筆者による）、

例へば、「<sup>しゅんえい</sup>春榮」（四番目物・現在物）について見ると、〈中略＝「嵯峨本」（観世流）と「車屋本」（金春流）とで〉殆ど別々の作品でもあるかの如く食ひちがって来たといふのは、〈中略〉一方が原典で他方が修正だとすれば、その修正はいつの時代に何びとの手で行はれたものであろうか。さういった決定は厳密な原典批判によってのみなさるべきものである。しかるに、謡曲に関しては原典批判といふことが従

来一向に行はれないのは、一つは古い信頼すべき文献が容易に手に入らないからに相違ないが、もうそろそろさういった方面の研究も始められてよい時期ではあるまいか。

と記しており、昭和32年現在でも文献学的研究がいちじるしく立ち遅れていたことが判る。

戦後でも古典全書刊行以前は、12番が喜多流本（昭和改訂版）、13番が「観世流現行の本文」を引用元としている。刊行後、14番（森野1958）、17番（福島1960）は日本古典全書を用い、福島は「改訂の跡が少なく、古態を残していると思われる」と資料的価値を認めている。が、刊行後でもテキストとして戦前の「日本名著全集」や「謡曲大観」を用いたものがあり（論文03、04、05、18など）しばらくは無頓着な状況であった。この日本古典全書以後、次々に刊行される古典文学全集の謡曲の巻の底本には、よく吟味された価値あるものが採られるようになっていく。

## 2・2 研究に耐えるテキスト

世阿弥自筆本として現存する曲目とその奥書年次は以下の通り。比較的早くから個々に公開されているが、現在は

### ① 『世阿弥自筆能本集』（影印編・校訂編）2冊

（月曜会編、表章監修、岩波書店、1997）

がこれら全てを収めていて便利である。

なにわ 難波	1413年	観世文庫蔵	昭和45年（1970）公開
もりひさ 盛久	1423年	宝山寺蔵	昭和18年（1943）公開
ただつ 多度津	1424年	宝山寺蔵	昭和18年（1943）公開
えぐち 江口	1424年	宝山寺蔵	昭和18年（1943）公開
うんりんいん 雲林院	1426年	宝山寺蔵	昭和18年（1943）公開
まつら 松浦	1427年	観世文庫蔵	昭和3年（1928）公開
あこやのまつ 阿古屋松	1427年	観世文庫蔵	昭和35年（1960）公開
ふる 布留	1428年	観世文庫蔵	大正15年（1926）公開
よろぼし 弱法師	1429年	宝山寺蔵	※江戸時代前期の、自筆本の忠実な臨模本。
かしわぎき 柏崎	年記ナシ	宝山寺蔵	昭和18年（1943）公開
ともあきら （知章）	1427年	宝山寺蔵	※世阿弥自筆ではない）



そして、それぞれに語彙索引が作成され、順次公開されている。いずれ一書を成せば語彙や文法の研究への大きな支援となろう。

31. 「世阿弥自筆能本『柏崎』語彙総索引稿」  
(金子彰・飯沼千智、『ことばとくらし』20、2008)
32. 「世阿弥自筆能本『盛久』語彙総索引稿」  
(金子彰・谷川淳子編、『東京女子大学日本文学』105、2009)
33. 「世阿弥自筆能本『難波梅』語彙総索引稿」  
(金子彰・宮本淳子編、『東京女子大学日本文学』106、2010)
34. 「世阿弥自筆能本『松浦之能』語彙総索引稿」  
(金子彰・宮本淳子・石黒のぞみ編、『東京女子大学日本文学』107、2011)
35. 「世阿弥自筆能本『江口』語彙総索引稿」  
(金子彰・石黒のぞみ編、『ことばとくらし』23、2011)
36. 「世阿弥自筆能本『雲林院』語彙総索引稿」  
(金子彰・富田千晴、『ことばとくらし』24、2012)
37. 「世阿弥自筆能本『多度津左衛門』語彙総索引稿」  
(金子彰・富田千晴、『東京女子大学日本文学』110、2014)
38. 「世阿弥自筆能本『布留』語彙総索引稿」  
(金子彰・石黒のぞみ・富田千晴編、『ことばとくらし』26、2014)

以下、利用しやすい活字本を、なるべく古い底本のものから順に並べてみよう。

- ② 『観世文庫蔵 室町時代謡本集』(影印篇・翻印篇) 2冊、表章編、観世文庫発行、1997。※観世宗節<sup>そうせつ</sup>筆本40曲、金春卷子本5曲など16世紀末までの写本97種。
- ③ 『日本古典文学大系 謡曲集』(上・下) 2冊、横道萬里雄・表章校注、岩波書店、1963。※凡例に「底本には主として室町時代の古写本を用いた〈中略〉観世流謡本で、できるだけ書写年月が古く、且つ系統の正しい本を底本として選んだ」とある。73曲。
- ④ 『日本古典全書 謡曲集』(上・中・下) 3冊、田中允校注、朝日新聞社、1957。  
※車屋本(金春流<sup>とりかいどうせつ</sup>鳥養道<sup>とりかいどうせつ</sup>断が1600年に刊行)野上豊一郎蔵本から100曲。その他の車屋本から野上本に無いものを35曲加え、合計135曲収録。
- ⑤ 『新潮日本古典集成 謡曲集』(上・中・下) 3冊、伊藤正義校注、新潮社、1988。※光悦特製本。1605-1615頃、本阿弥<sup>ほんあみ</sup>光悦<sup>こうえつ</sup>・角倉<sup>すみのくら</sup>素庵<sup>そあん</sup>により京都嵯峨で出版されたと伝えられる観世流の最初の版本。光悦本、角倉本、嵯峨本とも<sup>②</sup>。

100曲。

- ⑥ 『元和卯月本 謡曲百番 (全)』後藤淑他編、笠間書院、1977。※元和6年＝1620年の刊記がある。観世大夫黒雪の奥付のある最初の家元公認本。100曲。複製は『謡曲百番一元和卯月本一』版本文庫5 [4帙100帖]、伊藤正義解説、国書刊行会、1974-1981。
- ⑦ 『日本古典文学全集 謡曲集』(1・2) 2冊、小山弘志 / 佐藤喜久雄 / 佐藤健一郎校注・訳、小学館、1973-1975。※寛永6年(1629)刊観世流『寛永卯月本』を主として用い(59曲)、その他18曲については、(敦盛)〈半菰〉(羽衣)は明暦3年(1657)刊の観世流『野田本』、(嵐山)には『擬車屋本』などを用いている。77曲。
- ⑦' 『新編日本古典文学全集 謡曲集』(①・②) 2冊(小山弘志 / 佐藤健一郎校注・訳、小学館、1998)も基本的には同じ『寛永卯月本』底本だが、「翁」「巴」など収録曲が増えて合計81曲を収める。
- ⑧ 『新日本古典文学大系 謡曲百番』西野春雄校注、岩波書店、1998。※底本は寛永7年(1630)黒沢源太郎刊観世黒雪正本(全二十冊百番揃い)。100曲。

日本語史の研究としては、できるだけ古く、素性の明確なものが望ましい<sup>33</sup>。しかしそういうものは量的に十分には残っていないので、研究が成り立つだけの量を確保するために質を下げる(後世のものを使う)ということはある。古典籍一般において、伝本を把握するもっとも基礎的なポイントは「現存最古」と「最古の完本」であろう。色葉字類抄ならば、できれば前田本から用例が欲しい。しかし欠本なので、黒川本で補う。今昔物語集ならば鈴鹿本を見たい、しかし残存する巻は限られている。望み通りにはいかないから、次善のものを取り扱う理論・テクニックを磨くことになる。謡曲の中に擬古性、舞台性などを見出して、時代の言葉を知りたいときにはそこを引き算して考えるというのもその類である。

③の岩波大系は「最古本主義」と紹介<sup>34</sup>されるほどの徹底したものだが、本稿で紹介しているような研究論文では19番の他、あまり使われていないようである。例えば論文21番は④車屋本、23、24、25、26、27番は⑥元和卯月本を用いている。その依拠本文選択の理由について27番は記していないが、25番は「資料の均質性を考慮して」と書いている。これを(a)均質性、とし、他にも考えてみると、(b)考察に十分な分量(多い方がよい)、(c)刊記が明確に存在している、(d)底本を尊重した翻刻方針、(e)影印や複製により原本の確認ができる、といった点が日本語史研究的条件として挙げられる

だろう。⑥が選ばれて⑤⑦が選ばれない理由はこういうところにあると考えられる。

### 3 音韻史+文字表記の論文目録

最後に音韻関係を中心に、古いものから論文を列挙しておく。この分野は健全に研究が進んでおり、本稿の問題意識はここには無いが、「謡曲を資料とした日本語の研究」ということで総合的にまとめて参照できた方が今後便利であろうから、そのようにする<sup>45)</sup>。

39. 岩淵悦太郎 「謡開合仮名遣に就いて」『文学』8、1932
40. 岩淵悦太郎 「謡曲の謡ひ方に於ける入声ツに就いて」  
『国語と国文学』11-5、11-7（續）、11-9（完）、1934
41. 高田富三郎 「謡曲の吞節と国語の鼻母音」『国語と国文学』12-12、1935
42. 高田富三郎 「謡曲における連声の研究」  
『国語と国文学』16-6（上）、16-7（下）、1939
43. 岩淵悦太郎 「謡曲発音資料としての謳曲英華抄」  
『橋本博士還暦記念国語学論集』1944
44. 岩淵悦太郎 「謡曲の発音とその変遷」『幽玄』2-1、1947
45. 前田正民 「謡曲の発音について」『女子大文学』4、1952
46. 和田実 「謡本の表記について（上・中・下）」  
『国文論叢』3（1954）、6（1957）、7（1958）
47. 藤田弘子 「懸詞のアクセント調査—謡曲の胡麻点を用いた試み—」  
『国語国文』26-9、1957
48. 福島邦道 「音韻資料としての世阿弥自筆本」  
『国文学言語と文芸』1960年11月号、明治書院
49. 前田正民 「謡曲「つ」のノム音について」『甲南女子大学研究紀要』2、1966
50. 添田建治郎 「アクセント資料としての謡曲譜本の意義」『語文研究』34、1972
51. 添田建治郎 「謡曲譜本に反映したる和語アクセント—体系と若干の音韻史上の問題をめぐって—」『文学研究』71、1974
52. 川上泰 「アクセントと謡曲」『音声学会会報』150、1975
53. 前田正人 「謡曲における長音」『国語国文』46-4、1977
54. 添田建治郎 「謡曲譜本における型の旋律」『山口国文』4、1981
55. 添田建治郎 「謡曲譜本の上胡麻について」『語文研究』59、1985
56. 前田正人 「謡曲に残るむかしの発音 ノム音とノミ節」

- 『仏教大学報』37、1987
57. 前田正人「謡曲の発音と節付けに関する一考察 ノム音とノミ節について」  
『人文学論集（仏教大学）』24、1990
58. 坂本清恵「アクセント資料としての世阿弥自筆能本一声点を中心に一」  
『国語研究』60、1997
59. 望月郁子「世阿弥自筆能本における用字原理一非字音語のばあい・「布留の能」  
を中心に一」『二松（二松學舎大學大学院紀要）』11、1997
60. 望月郁子「世阿弥自筆能本（宝山寺蔵本）における記号○の分布とその機能」  
『二松學舎大學論集』41、1998
61. 坂本清恵「世阿弥自筆能本からみたアクセント体系変化の時期について」  
『国文学研究』128、1999
62. 坂本清恵「謡曲における訛りとアクセント」  
坂本『中近世声調史の研究』第Ⅱ部第3章、笠間書院、2000
63. 近藤清兄「喜多流謡本の「含」」『東北大学言語学論集』12、2003
64. 長谷川千秋「世阿弥自筆能本におけるマ・バ行音の表記一表記の表音性をめ  
ぐって」『国語文字史の研究 9』、和泉書院、2006
65. 安岡充令・山本聡「形態と文字からみる室町期謡本：金春禅鳳自筆謡本の位置  
（上）」『専修国文』81、2007
66. 安岡充令「形態と文字からみる室町期謡本（中）」『専修国文』83、2008
67. 安岡充令「形態と文字からみる室町期謡本（下）」『専修国文』85、2009
68. 松居郁子「下掛り謡本における大夫系節付の特徴 ゴマ点の用法を中心に」  
『神女大國文』22、2011
69. 松居郁子「下掛り謡本における大夫系節付の問題 成立時期とその背景」  
『神女大國文』23、2012
70. 李在鏞「15世紀日本語における促音の表記 世阿弥自筆本を中心として」  
『名古屋言語研究』7、2013
71. 坂本清恵「謡の連声」『能と狂言』13、2015

#### 4 今後の展望

語彙や文法の研究において、謡曲という資料を積極的に使おうとすべきか否か、という  
ことについて答えを出そうとした研究資源調査であった。

劇であるから、語彙研究の方法論的には、狂言の同じ話を虎明本と虎寛本で比較し、

あるいは天草本ヘイケと平家物語を比較し<sup>90</sup>、同一文脈での使用語の違いを歴史的变化とみなすというやり方を参考にしていいたいと思う。同じ曲を異なる伝本で対照したものに、

72. 前田正民「謡曲「江口」に於ける世阿弥自筆本・光悦本・現行観世流本の対照」  
『甲南女子大学研究紀要』3、1967

がある。この72では詞章の異同の検討結果について、

結局、世阿弥時代のもの<sup>91</sup>と現行のもの<sup>92</sup>とは、アヒの狂言のセリフを除いては大きな違いのないこと。殊に光悦本<sup>93</sup>と現行本とは九分通り同じいことが認められる。

と結論しているけれども、例えば冒頭部分は次のようであり、

世阿弥能本=月ワムカシノトモナレハ \ / 世ノホカイツクナルラン  
(擬)光悦本=月は昔 のともならば \ / よの外 いつくならまし

条件表現と推量の助動詞の異同であるから、数は少なくとも日本語史としては充分な考察対象になる。また、三宅晶子「世阿弥時代の能本」(『世阿弥自筆能本集 校訂編』)は、例えば〈雲林院〉は現存謡本の形とは全く異なる後半を持ち、〈中略〉世阿弥時代以後もなお、詞章・演出の上で大きな改変が施されていた事実が理解できる。〈中略〉しかしそのような曲以外の、〈江口・盛久〉のように自筆本から現代に至るまで構想にかかわるような大きな異同のない曲の存在は、より重要であろう。世阿弥時代からあった曲の大半は、室町時代後期以降の謡本しか現存せず、それらの示す形を以って世阿弥時代の能を考えざるを得ないのが現状であるが、多くの場合そうしてもさしつかえない程度には詞章が固定的であることを〈江口〉などは保証しているのである。(p. 3)

と述べているが、これは話の筋、構想を問題とする文学的研究と、本稿でこれまで述べてきたような言語研究(中近世の日本語の資料の一つとしてみている)とのアプローチの違いがよく分かる一文である。言語研究としては、あまり筋にかかわらない部分でも個々の表現が重要なので、後世のもので世阿弥時代(の言葉)を類推してさしつかえないとは言えない。しかし内容が同じなら、使用単語の差、助詞助動詞の用法変化などが比較しやすくなるので、語彙史、文法史的には好都合だといえる。

ところで、日本国語大辞典など古語を収録する辞書に、謡曲の用例はよく引かれている。初出かそれに類する早い例も少なくないだろう。例えば〈羽衣〉の最後に出てくる「いろびと(色人)」という語<sup>94</sup>は、この“美しい人”の意での類例が無く、『謡曲拾葉抄』(1772)がすでに(I)「宮人」の誤写、(II)白楽天の「三五夜中新月色」を踏まえた言葉、の二説を示している。それを受けて岩波古典大系(活字本<sup>95</sup>:1963)では、補注において「古写本を検してもすべて「いろ人」または「色人」であり、少なくとも室町

末期以降に生じた誤写ではない」(下巻 p.439) と、現代の文献学のレベルで一歩すすめる。

その道の専門家による、一つ一つの表現の出典等に関する細かな考証は、本文の校訂・注釈という形である程度の蓄積がすでにある。語彙の研究者としては、常に語彙研究資料としての謡曲の価値を問い直しながら、使用される単語、語法の偏りとその理由などを総合して体系的な把握を目指すことになる。「謡曲の語彙」という簡潔で大きなタイトルがつけられるのはいつか。

## 注

- (1) 2011年度までは「古代中世の芸能」という科目だった。
- (2) 2001年傑作宣言登録、2006年無形文化遺産の保護に関する条約発効、2009年正式登録。
- (3) 1999年新訂増補版、1987年初版
- (4) 執筆者は古川久(1909-1994)。この項目は旧版『国語学研究事典』(1977)から更新されていない。
- (5) 蜂谷清人『狂言台本の国語学的研究』笠間書院1977、同『狂言の国語史的研究—流動の諸相』1998、小林賢次『狂言台本を主資料とする中世語彙語法の研究』勉誠出版2000、同『狂言台本とその言語事象の研究』ひつじ書房2008など
- (6) 書籍では『国語学研究文献索引 国語史編』(秀英出版、1996)、webでは国立国語研究所のデータベース集「日本語研究・日本語教育文献データベース」などが利用できる。檜書店の月刊誌『観世』には「能・狂言文献要覧」という学術的な論文・書籍を掲載する連載があったが、425回(2013年11月号)をもって終了し、『武蔵野大学能楽資料センター紀要』26号(2014)「文献目録」に引き継がれた。
- (7) 文学的文体論一例えば岡崎正「謡曲の文体—「求塚」の詞と節を中心に—」(『駒沢短大国文』11、1981)、竹本幹夫「能の文体を作ったもの」(『中世説話とその周辺』国東文庫編、明治書院、1987)一などは対象外とした。
- (8) 『日本名著全集 謡曲三百五十番集』(野々村戒三校訂、1928)から曲舞と番外を除いた253曲を依拠本文としている。名著全集は大正末年当時のシテ五流の謡本をもとに校訂したもの。209曲が観世流。
- (9) 「七五調を基調とする韻文と、対話や独白の箇所用いられる散文(「候」や「なり」で結ぶ)とから成る。古典の詩歌、文章を引用または下敷きにしたり、掛詞、縁語、序詞などの技巧を駆使したり、対話から地へ、地から対話へと巧みに転換したり等、その詞章はあでやかに美しい。」(『国語史辞典』「謡曲」京極興一執筆、1979)、「詞章の創作に際しては、格別にそれが吟唱され易く、舞い易い考慮が払われた。(中略)序破急といった構成上の形式だの(中略)音楽形式などの制約に縛られる結果、曲節を整える工夫が論理的な文章構成に優先して、いわゆる「つづれ錦」と批評される文体を産むことになる。」(論文16番)

- (10) 山内論文全体の構成は次の通り。
- 一 記述の方法
  - 二 構文
    - 1 「是は…にて候」一判断文
    - 2 「の・が」一叙述文とその主格
    - 3 「なれや」「こそに」一係結び
  - 三 文末の助動詞の表現
    - 4 「ばや（と存候）」「うずる（にて候）」一意志
    - 5 「まじい（ぞとよ）」一否定の意志
    - 6 「やらむ」「とかや」一文末語の副助詞化
  - 四 条件表現
    - 7 「間」「程に」一接続理由条件
    - 8 「が」「に」「を」一接続逆接条件
    - 9 「ばこそ」仮定から反語的否定へ
  - 五 「なり」その他
    - 10 「(声す) なり」一伝聞推定と指定
    - 11 その他
- (11) 八嶋正治「野々村戒三の学問」『国文学研究（早大国文学会）』81、1983
- (12) 新潮古典集成の伊藤による解説（p.376）に、長らく「光悦本」と呼ばれてきた本の影印『日本古典全集（帝室御物）謡曲百番』4冊（正宗敦夫・与謝野寛・与謝野晶子編纂校訂、1927-1928）について「「擬光悦本」とでも名付けるべき別種の古活字謡本で、古版謡本の中では、より室町期古写本のかたちを残していることが認定されている」と言及がある。この全集本については『能・狂言必携』（別冊国文学No.48、學燈社1995）の「能・狂言テキスト便覧」（樹下文隆）でも擬光悦本とし「天正期の元頼系本文の面影を伝える」とある。が、『能・狂言を学ぶ人のために』（2012）のp.280では「光悦本」本文として挙げられており、旧説に従う積極的な理由なくば、学術的に後退したと言わざるを得ない。
- (13) もちろん、書写年が古くなくても素性のはっきりした伝本である「青谿書屋本土佐日記」のような善本もある。
- (14) 『日本古典文学研究史大事典』「能楽」（樹下文隆執筆）、p.755、勉誠出版、1997
- (15) 謡曲関係の日本語研究として「方言差によって話が通じないのを謡曲によって克服したという話〈伝説〉」というものもあり、これについては徳川宗賢らの論考があるが、本稿の趣旨からはずれるので、注記として岡島昭浩「武家共通語と謡曲」『雅俗』3（雅俗の会：九州大学、1996）を記すにとどめる。
- (16) 新しいものでかつ能の関係するものとして小林千草『『天草版平家物語』を読む 不干ハビアン の文学手腕と能』（東海大学出版部、2015）がある。
- (17) 日本古典全集なので擬光悦本のこと。注12参照。

- (18) 日本国語大辞典（第二版、2001）もこの例だけを載せ、出典を「光悦本謡曲・羽衣（1548頃）」とする。これを第二版別冊の「主要出典一覧」で確認すると、出どころは日本古典全集とあるので、この用例は（何度も書くが）「擬光悦本」のものである。1548という数字は〈羽衣〉の初演推定年だが、古写本は無く、岩波大系は宝生流の現行本を載せている。つまり、日本国語大辞典の用例の実質は「擬光悦本にあるが1548年頃から存したかどうかは不明」という、表示されている情報とは全く異なるものとなる。こういう一つ一つの不確かな情報が研究の壁となっていく。この〈羽衣〉の「色人」は車屋本（テキスト④）で確認することができる。

【図】福島（1958）で言及されている項目

分類				語例						
用言	動詞	活用の種類	四段	埋む	番ふ	伝ふ	満つ	報ふ		
			二段	怪しむ	開く					
		格助詞		二愛づ	二好く	二背く	ヲ背く			
	形容詞	仮定		～くは						
		シク活用用形		嬉しし。	甚だしし。					
	連体修飾		面白の	今めかしの	おろかの	なかなかの	好かずの			
助動詞	新要素		う	うずる	まじい	守護させ給へ				
	古代語法	完了	つ	たり	り					
	残存	回想	し	けり						
	用法変化		まし	らむ						
	不変	伝聞	なり							
	誤用？		出づならば							
助詞	格助詞		の／が							
	接続助詞		と	とも	ども	からに	つつ	ば		
	副助詞		は	や	こそ					
	終助詞		ばこそ	ばや	ごさめれ	やらん	なれや			
敬語	候	語形	さぶらう		さむらふ		ざう			
		用法	候へ							
掛詞・縁語		(省略)								

(本学教授)